

## ～ セピア色の風景 ～

## 「藁(わら)」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

私の幼少のころ、稲作のほとんどが人による作業だった。田植えは一株一株手植えであり、収穫の稲刈りはこれもまた一株一株手刈りだった。手刈りされた稲束は、田んぼで天日で乾燥された後、脱穀作業により穂を落とされ藁束(わらたば)となった。

稲作農家には隣接して、藁束を収納する大きな藁小屋があった。いろいろな用途に使われる一年分の藁束を収容する倉庫なため、それなりに大きなものであった。わが家では、より多くの藁束を藁小屋に収容するため、親父が工夫をしていた。

まず、大きな藁束(いわば円筒状のもの)をそのまま重ねていくと隙間ができるため、重ねる際に藁束を束ねている帯(これも藁をつないだもので、「スゲ」と呼んでいた)を解いていった。いずれ使う際にはまた束ねる必要があっ

たが、その手間を惜しがらず多く収容する方を選択していた。

もう一つは、屋根裏いっぱいまで積み重ねるため、滑車を使ったことである。滑車は、屋根の三角の頂点部の部材(棟木(むなぎ)という)に針金を通し、それに引っかけた。

一列積み重ねるたびに滑車の位置を移動させる必要があったが、屋根裏に張り付いてトビ職のような作業を親父はいとわなかつた。

稲藁の用途は、牛馬の餌に始まり、俵・筵(むしろ)・縄・草履・箒(ほうき)の材料であり、寝せて使えば既の牛馬の敷き布団となり、野菜の根元の敷物、冬場の野菜保存の断熱材となった。

立てて使えば、並べて竹で挟んで柵の壁となり、円錐形に広げて野菜の「寒さよけ」となった。つる有り野菜の出芽のときは、その上に藁を敷

本下げ(…に手をくれるという)つるがつかまりやすかった。いずれも藁は、その使命を果たすと土に還り、次の作物が成長するための栄養となった。

「藁にもすがる」という言葉では、藁は頼りないもの、代名詞のような言葉であるが、昔の稲作農家の生活は藁に頼り、かつ藁が不可欠のものであった。縄文時代より稲作は続いているものの、機械化により稲藁は収穫と同時に田んぼで切断され、農家に持ち込まれることはなくなった。稲が、お日さまの光を十分いただいで出来る藁の減少化とともに農家、農村の自然とともにあった藁文化も減少していった。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める